奥南部漆物語 URUSHI

安比川流域の日本遺産をたどる絵図と漆生活ごよみ

日本遺産奥南部漆物語推進協議会
二戸市 八幡平市

自然の恵みを生かしながら生きるための知恵を自らつくりだす

安比川流域

この地で人々は自然の恵みを生かした暮らしを古より営んできた。それは、安比川流域における一体的な漆器製作を可能にし、漆が生活を支える文化を育んだ。

「自然の恵みを生かしながら生きるための知恵を自らつくりだす」

この言葉からは、厳しい自然と向き合いながらも、寄り添って生きる覚悟と誇りが溢れている。奥南部漆物語は、この地に住む人々が受け継いできた漆に関わる技術、暮らしによって培われた生活文化の知恵を今に伝え、未来に継承していくものである。

日本遺産認定とこれまでの取組

令和２年６月、文化庁により「“奥南部”漆物語～安比川流域に受け継がれる伝統技術～」が日本遺産に認定されました。これを機に、二戸市と八幡平市は、奥南部漆物語に関する情報発信と今後の地域活性化に向けた取組の一環として、安比川流域の住民を対象としたヒアリングやワークショップを実施してきました（ワークショップ開催地：細野地区、畑地区、荒屋地区、五日市地区、浅沢地区、田山地区、舘市地区、門崎地区、天台寺周辺地区）。本紙はワークショップなどを通じて地域住民の方々から頂いたたくさんのご意見や情報を元に制作されました。

令和４年11月発行

発行：日本遺産奥南部漆物語推進協議会
編集・制作：(株) 未来政策研究所
デザイン：(株) アートポスト
イラスト：森川まなみ

問い合わせ先
二戸市総合政策部公民連携推進課
〒028-6192 岩手県二戸市福岡字川又47
☎:0195-23-3111

奥南部に長く受け継がれる漆の生活と文化

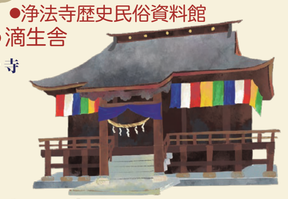
八幡平市から二戸市へと流れる安比川。民俗学の祖である柳田國男は著書『豆の葉と太陽』の中で、この流域を「奥南部」と称し、川とともにある風景を讃えました。

安比川流域では、古くから漆を利用する生活が営まれ、縄文時代には既に漆が装飾などに利用されていました。奈良時代に天台寺が創建されてからは、装飾がなく実用性の高い漆器が寺の僧侶たちによって使用され、やがて庶民の間に広まっていきました。その後、藩政時代には盛岡藩が、漆を重要な産業として奨励するようになり、防湿剤としての漆や漆器だけでなく、漆の実を使った漆蝋、漆の木を使ったアバギ（浮子）など、生活の様々な面で利用するものとして漆関連製品が積極的に生産されるようになりました。

太平洋戦争を経て、生活様式の変化や化学製品の普及などにより、漆産業は衰退していきますが、地域の人々によるウルシの木の植林、漆掻きや漆塗り技術の継承、漆製品の生産・販売等の粘り強い取組により、安比川流域での漆の生活と文化は今日まで地域の誇りとして受け継がれてきています。

天台寺
Tendaiji Temple

●浄法寺歴史民俗資料館
●滴生舎



●天台寺例大祭
地元住民が「御山」と呼び、信仰してきた天台寺。「御山御器」と呼ばれるこの地域の漆器の起源はここにあるとされる。天台寺では5月と10月に例大祭が催され、かつては瀬戸内寂聴師（故人）による法話も行われた。

●佐藤家
佐藤家はかつて浄法寺大清水で漆器などの売買を手広く営んでいた。漆器の販売先は北海道から遠く朝鮮や中国まで及んでいたとされる。

●齋藤家
石神の大家齋藤家はかつて漆器業を大規模に展開していた。木地づくりから漆塗りまで一貫生産を行い、問屋としての活動も行っていたとされる。

縄文時代から漆が装飾などに利用されていた。

●杉沢の伝説
杉沢地区にはいつの時代からか観音様の姉弟が暮らすようになったが、ある時お堂が火事になり、弟が天台寺に逃げていったとされる伝説。今でも杉沢地区と天台寺には十一面観音が祀られている。

田山は木地作りが盛んであった土地。ここには、だんぶり(とんぼ)のおかげで酒が湧き出る泉を見つけた夫婦が長者になったという伝説がある。

米代川

木地師、マタギ、炭焼きなど山仕事が多いこの地域では昔から山の神を祀っている。佐比内にある山の神象は男の神で、斧を持っているのが特徴。

奥南部には漆の聖地を守る暮らしが今もあります

奥南部の安比川流域は漆の聖地と言えます。この聖地を守るために、多くの人々によって漆関連技術を継承する取組、生漆や漆器を生産・販売する取組、ウルシの木を植林する取組などが行われています。そして、現在でも奥南部に残る祭事などの伝統文化を住む人々が守っています。古からこの地で営まれてきた自然の恵みを活用した人々の暮らし、そして、そこで育まれ、積み重ねられてきた文化が漆の聖地を今に伝え、未来に継承していくのです。

「荒屋新町の仕事…好んで黒地に黄や朱で絵を描く。この絵に山水だとか桃だとか銀杏だとか伝わった模様があっていたくうまい。ちょっとこれだけ活々と描き得る画工は他にそう見当たらない。」

柳 宗悦

荒屋

畑

●関家
赤坂田の木地師の一族。盛岡藩の御用木地師であった左衛門四郎は、長年務めた褒美に苗字帯刀を許され、「関左衛門四郎」と名乗るようになった。

細野

八幡平市

●安代漆工技術研究センター
●安比塗漆器工房

八幡平市博物館
Hachimantai City Museum

安比川流域の多様な自然と交流の歴史が生んだ「漆生活文化圏」

漆関連製品を生産するのみならず、漆を日常の生活の中で利用してきた歴史を持つ安比川流域は「漆生活文化圏」と呼ぶことができます。この「漆生活文化圏」は「①冷温帯気候が生み出す自然の恵み」、「②安比川がもたらす恵みと生活」、「③伝承技術の恵みと誇り」、「④歴史が生んだ恵みと交流」という４つの要素が重なって奇跡的に出来上がったと考えられます。

安比川流域「漆生活文化圏」を生み出した４つの奇跡

壱 冷温帯気候が生み出す自然の恵み

安比川流域は冷温帯に属し、その気候の中で落葉紅葉樹林の森が形成されてきました。ブナ、トチ、ケヤキなどは木地（漆器の元となる木材）の素材となり、ウルシからは樹液が採取されました。また、ウルシの実は蝋そくや艶出しに、ウルシの木はアバギ（浮子）や薪としても利用されました。冷温帯気候の中で育まれた自然の恵みが安比川流域での一体的な漆器製作（木地作り、漆の生産、漆塗り）を可能にし、漆が生活を支える文化を育ててきたのです。

弐 安比川がもたらす恵みと生活

八幡平市から二戸市にかけて流れる安比川。その流れを利用して、上流の山で伐採された木材は下流に運ばれ、水車の動力を利用したロクロで木地に加工されました。また、安比川沿いには河岸段丘が形成され、冷温帯気候と相まって、ヒエ、キビ、アワ、ソバなどの雑穀や大豆などの畑がつくられていきました。安比川の流れが、漆器製作に必要な材料の流通や生産に必要な動力を提供し、さらに雑穀などの生産を可能にして、人々に生活の糧をもたらしてきたのです。

参 伝承技術の恵みと誇り

漆器製作の一連の工程が安比川流域で分業として行われ、その過程で、山仕事、木地挽き、漆掻き、漆塗りなどの技術が育まれ、今日まで継承されてきました。また、地域住民の精神の支えでもあった天台寺の僧侶たちが作った漆器は、やがて参拝者らに供されるようになり、人々の生活に広がっていきました。それらの漆器は「御山御器」と呼ばれ、人々の誇りとなり、普段使いの漆器として生活の様々な場面で用いられながら漆生活文化を形作ってきたのです。

四 歴史が生んだ恵みと交流

安比川流域には歴史的に大きな二つの街道がありました。一つは盛岡から七時雨山を超えて大館に至る鹿角街道、もう一つは八戸から浄法寺を通って安代に至る浄法寺街道です。これらの街道を通って、人、物、技術など様々なものが出入りし、交流が生まれ、交易の場としての市が開かれました。市の立つ日は「市日」と呼ばれ、木地や漆、漆器も売買されました。こういった街道と人々の交流の歴史が、漆器製作や漆文化を時代を超えて持続的に支えてきたのです。